

birgärü を nach einer Stelle zu と譯し (Uigurica, 56.) たり、されどまた Pelliot 氏が之を en un seul と譯したるが如く (通報 Mai 1914, p. 266.) 「一ツに」とも譯し得べきなり、此處にては「汝等一つとなりて」の意と解くべきが如し。

(4) učluq は uč 即ち先端、頂きなる語を形容詞となしたるものなるべく、「極限の」、「極端なる」の意なるべし。

(5) kōrkāli ärklig は「見るべき力を持てる」の意なれば、觀世音の「觀」の意を譯して、其の漢名の上に冠せしめたるに過ぎざるべし。

(6) xut は八陽神呪經の語彙に掲げたる如くにただ尊稱 Majestät の意と見る可きならん。Bartold の Historische Bedeutung der Alttürkischen Inschriften, S. 20 にも、Majestät と同様に用ゐられたるなるべく、glück の意にあらずとし、Müller も Uigurica I, S. 56 に此の説を認めたり。

(7) qasīncīq は試みに補ひたれども其の當否を知らず、只だ iq なる語尾の文字が見え、而して Radloff 氏の本には此の語が存するを以て、かりに此れを補ひたるのみ、然も果して此の語なりとするも、Radloff 氏の記せるが如く (Kuan-ši-im Pusar, 38) 全く其の語義を解する能はず、氏は氏の本に ulur 即ち「大」の語と synonym に用ゐたれば、これも同義なるべしと推したるに過ぎず、余もまた其の原義を知るを得ず、かりに漢文に見ゆる「巍巍」なる文字を對せしめたり。〔本書 117 頁注(15)参照〕

(8) amranmaq は屢々「愛する」の意に用ひらるゝ語なり、こゝには其の義より「淫」なる語を寫したるものなり。

(東洋學報第五卷第三號, 大正四年九月)